

ピーマイラオ（ラオスの正月）は太陽暦の4月中旬なので1月1日は特別な日ではない。カンボジア、ミャンマー、タイ等と同じように新年は4月の暑い盛りに迎え、灌仏会（お花祭り）でお釈迦様に甘茶を掛けるように、國中、水を掛け合って新年を祝うという。

しかし、47民族からなるラオスは、お正月が異なる。例えば、モン族の新年とラオ族のお正月が異なっている。ラオスの中でも高地ラオ族のモン（メオとも呼ばれる）（中国名；ミャオ）の新年は、12月中・下旬から始まり、1ヶ月もの祭りが続くのも珍しくないようである。新年の始まりは、その直前2週間前頃に部族の長が決めるとかで、急に決められて戸惑いはないのだろうかと思うが、長年の習慣からか、ほとんど混乱はないという。モン族の今年の新年が、いつ始まったのか、低地ラオ族（ラオ・ルム）に尋ねても答えは返ってこない。大晦日には大掃除もし、新年には餅つき、コマ回しや羽根突きもする。新年の料理は村中の各家庭で作られるのだが、自分の家だけでなく、村中の家を渡り歩き、新年のご飯を食べ歩く風習がある。

一方、ラオ・ルム族のお正月は毎年の4月14日・15日・16日で決められている。最初の日が日本で言う「大晦日」。2日目が「前の年と新しい年の間の日」。そして3日目に「元旦」になる。一般的には最初に日にはお寺に聖水を作りに行く。きちんと正装して、托鉢用の桶に水を入れてお寺に行き、お坊さんにお経を吹き込んでもらい、聖水にする。新年が良い年であるように家族全員がその聖水でシャワーを浴びます。それから、お寺にお参りし、仏様を清める。お互いに水を掛け合って、悪気ものを払い落として、体を清めて新年を迎える。